

資料) 大学間連携による ICT を活用した世代間交流活動に関する研究

Research on Intergenerational Exchange Activities Using ICT through Inter-university Collaboration

三田 薫¹⁾ 及川 麻衣子²⁾

抄録

2020年度と2021年度に実践女子大学短期大学部と山野美容芸術短期大学の学生がICT (Information and Communication Technology) を活用した世代間交流活動を実施した。具体的にはZoomを用いて学生同士、学生と異世代者の交流の機会を設けた。学生2～4名と異世代者1～2名の組み合わせで、昼休みにZoomのブレイクアウトルームを用いて同じメンバー同士で15～20分の交流を複数回行った。学生はコミュニケーション能力と社会人基礎力を高めていった。一方高齢者は新しい活動に挑戦する機会となり、またICT機器を使用する動機付けにもつながっていた。しかし学生のコミュニケーション能力不足や高齢者のICT機器に不慣れな点等、課題も明らかになった。これらの活動の成果と課題を、4つのグループのインタビュー結果とともに紹介する。

キーワード: ICT活用 世代間交流 オンライン会議システム 大学間連携 地域連携

1. はじめに

少子高齢化が加速する日本社会において、高齢者には生きがいを見出せる環境作りや、他者と容易につながることによる孤立化解消が必要である。一方学生には、少子高齢化社会をたくましく生きる人材となるために、従来と異なる教育プログラムが必要となる。さらに自治体にとっては、高齢化社会の現場に寄り添ったサポートをするために、高齢者の生の声を多く収集する方法があることが望ましい。

こうした三者のニーズに応える活動を目指して、2020年度に「ICTを活用した世代間交流地域貢献」プログラムを開始した。

2. 先行研究

日本では高齢者がとかくサポートされる立場で議論されることが多いのに対し、檜山他(2015)^[1]は、高齢者と若者を引き合わせる意味を強調し、「反対に高齢者が長年培ってきた知識や経験を活かして、若者を見守りメンタリングするような仕組みを作ること、高齢社会に価値を見出す手段となりうる」と述べている。しかしそれを実現し、少子高齢化社会の課題解決に資するためには、「高齢者層のオンラインメディアへの参加が前提となる」ことも同時に指摘している。

高齢者は現在オンラインメディアに参加しやすい環境にあるだろうか。総務省『令和元年通信利用動向調査』によれば、情報通信機器の普及状況はスマートフォンが70代の3割弱、80歳以上は1割弱、パソコンに関しても70代は3割強、80歳以上は1割強となっており、「恒常的にインターネットを利用する環境とは言えないことがわかる。」(荻野, 2020)^[2]。

ICT機器を初めて使用する高齢者、不慣れな高齢者にとって、ICTを活用した交流参加への不安を簡単に払拭することは容易ではない。

佐藤他(2014)^[3]は、高齢者のパソコン使用について、事前説明や取扱説明書、アフターケアなど「人的・物的支援」が高齢者の安心をもたらすと述べている。また高所(2015)^[4]は、高齢者を対象とした、スマートフォンの講座実績から、最初はスマートフォン操作に不慣れな高齢者であっても、繰り返し支援を行うことにより、十分スマートフォンが活用できるようになることを明らかにしている。

社会学者レイ・オルデンバーグ(Oldeberg, 1999)は著書の中で「第三の場所」の概念を提唱し、家庭や職場とは独立した場所で、仲間と一緒に、定期的に、自らの意思で、肩肘をはらない雰囲気の中で、楽しい時間を過ごせる場所が必要だという考え方を示している。この「第三の場所」は、特に社会の一線から退いた後のシニア層にとって、社会との接点を維持

1) MITA Kaoru 実践女子大学短期大学部
連絡先:〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49

2) OIKAWA Maiko 山野美容芸術短期大学
連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鎌水 530

できる点, また社会における自分の存在意義を確認できる点で重要である. 八藤後他 (2008) ^[5]は, ICT の活用事例において「第三の場所」の理念を踏まえた地域・社会環境づくりという視点が肝要であること, また ICT の活用が「団塊世代」を筆頭とする退職後の中高年層に「自身の自由な時間と場の保障」「地域貢献」「新しい仲間づくり」「職業の時間・空間的延長と拡大」をもたらすことを指摘している.

3. 両短期大学の地域活動の ICT 活用の変遷

3. 1. 実践女子大学短期大学部

実践女子大学短期大学部では 2016 年度より様々な学生参加地域活動を実施し, その推進に際して積極的に ICT を活用してきた.

2019 年度は新たな試みとして, キャンパスにいる学生が高齢者とオンラインで交流する活動を開始した. 2019 年度前期には, スカイプを用いて渋谷キャンパスの短大生と日野キャンパスに集う高齢者をつなぎ, 世代間交流を実施した. 同年度後期には札幌の世代間交流施設「むくどりホーム」や福岡の高齢女性自宅と渋谷キャンパスを結び, 学生が毎週 1 回昼休みにスマートスピーカー (Amazon エコーショー) を使用してビデオ通話を行い, 学生 2~3 名が画面を通して 1 人あるいは複数の高齢者と話した. 10 月から 12 月までで計 11 回, 延べ 60 名の学生がこの活動に参加した.

3. 2. 山野美容芸術短期大学

山野美容芸術短期大学では高齢社会に向け美容がどのように寄与できるのかをテーマに, ジェロントロジー, 美容福祉, ボランティア活動を通して美容教育を行っている. これまで医療・高齢者・障害者施設, 地域社会において美容による課外活動, 実証研究を推進してきた.

2020 年より自治体や企業と連携を行い, 「福祉相談窓口の多チャンネル化」の 1 つとして美容を介した相談による福祉課題の早期発見や, 美容室を活用する実証研究を行った. その最中, コロナウイルスの蔓延により, 対面での研究や課外活動が困難な状況になり, ICT を導入した研究・活動の検討を開始した.

4. 地域連携コンソーシアム発足と短大連携

公益社団法人私立大学情報教育協会の短期大学会議教育改革 ICT 運営委員会では, 2020 年度に「短期大学による地域貢献支援事業コンソーシアム」を設立した. これにより複数の短期大学と自治体等関係機関がネット上にプラットフォームを形成し, 教育を通じて地域貢献支援事業を推進するモデルを策定することとなった. その 1 つである「高齢者との交流を促進し, 課題解決策を導き出す支援事業」コンソーシアムで, 実践女子大学短期大学部と山野美容芸術短期大学が協力して活動を開始することとなった.

5. 2020 年度報告 (本研究の背景)

5. 1. 2020 年度活動内容

Zoom を用いた異世代交流活動を 2020 年度前期・後期ともに行った. Zoom のブレイクアウトルームを用いて 1 ルームに 3~5 名程度参加して実施した. 世代間交流の前期参加者は学生が 19 名, 社会人が 12 名, 後期参加者は学生が 29 名, 高齢者・社会人が 9 名であった. どちらの学期もブレイクアウトルーム 9 室で実施した.

前後期とも最初の 2~3 回は実践と山野の学生同士の交流, 次の 3 回は学生と高齢者・社会人の交流という 2 段階の交流活動を実施した. 学生は高齢者・社会人と交流する前に学生同士の交流をしたため, オンラインの顔合わせと会話に慣れ, 世代間交流の予行演習となった. 最終回は各ルームの代表が活動の振り返りを教職員や自治体職員に行った.

活動時間は, 火曜日の昼休み 12 時半から 12 時 50 分であった. 授業や実習で忙しい両短大の学生が参加できるよう, 実施時間は 1 回 20 分に限定した. 交流の際のテーマは, 1 回目の顔合わせでそれぞれ相手が自分にリクエストする内容を聞き出し, それについて翌週以降ミニプレゼンテーションするというものであった. 学生はコロナ禍の影響で大学授業の大半が Zoom のオンライン授業であったため, すでに Zoom の操作に慣れており, あらかじめ準備したパワーポイントの画面共有などを滞りなく行っていた.

参加者は, 高齢者, 短大 OB, 地域の自治会長などの社会人, 教職員の知り合いや家族であった. 高齢者のサポートは, 両短大の教職員が行った.

5. 2. 2020年度活動の成果と課題

2020年度のZoomによる世代間交流を、2019年度に実践女子大学短期大学部で実施していたスカイプやスマートスピーカーを用いた活動と比較してみると、様々な利点があった。学生に専用の機材を提供しなくても、また学生本人がキャンパスに来ていなくても、自分のパソコンを用いて活動に参加することができた。これは大学のZoomオンライン授業による副産物とも言える。

2020年度活動は私立大学情報教育協会の「高齢者との交流を促進し、課題解決策を導き出す支援事業」による2つの短大の協働活動となったため、2019年度には実施できなかった他短大の学生との交流が実現した。学生は、学生同士の交流を楽しんでいたようで、前期に活動に参加した学生のほとんどが後期にも継続参加を希望した。また前期参加した学生の多くは、社会人参加者とのコミュニケーションから多くのことを学び、短時間での交流ではあったものの、活動前後の自分の気持の変化や自己の成長を感じている。活動後の振り返りでは、以下のような意見があった。

「コロナ禍でオンライン授業となり、なかなか友達との交流ができず、学生生活に不安しかなかったが、この活動で他校の学生さんと交流することで、悩みを共有でき、自分だけが悩んでいることでないということがわかり不安が払拭された。残りの学生生活を頑張ろうと勇気がでた。」

「将来の進路について悩んでいたが、高齢者の方のアドバイスにより自分の夢に向かい、自分の気持ちに正直に頑張ろうと背中を押してもらえたことが嬉しかった。」

「オンラインでも心の通う交流が可能だと確信した。」

成果とともに課題も明らかになった。1つ目の課題は、交流の際のトピック選びの難しさである。2020年度は1回目の顔合わせの際、お互いに聞きたいことをリクエストして翌週以降ミニプレゼンを行うことにしていたが、互いに聞きたいことを引き出すのは簡単ではなく、限られた時間の交流を滞らせることがあった。

2つ目の課題は、社会人参加者のうち約半数の高齢者がICT機器に不慣れであったという点である。Zoom接続に際して毎回両短大の教職員のサポートを受けており、そうしたサポート人材を確保できなければ活動拡大に限界があるという難しさがあった。

5. 3. 2020年度活動の課題克服の試み

2020年度に明らかになった2つの課題を解決し、また社会人の交流範囲を広げることを目指し、新聞で紹介されていたシニア向けに生涯学習の機会を提供するNPO法人BABA lab(ババラボ, さいたま市)に2021年度の活動協力を打診した。この団体は「BABA labシニアチャンネル」をYouTubeに開設して「コンビニスイーツの紹介」など、高齢者が出演する動画を数多く載せている(日本経済新聞電子版2021年2月12日)。代表の桑原静氏から協力の了解を得ることができた。

6. 2021年度活動内容

(1) 参加人数

- ・2021年6月9日と16日学生同士交流
学生参加者42名(実践26名, 山野16名)
- ・6月23日, 30日, 7月7日世代間交流
学生参加者37名(実践24名, 山野13名)
社会人参加者18名(実践と山野の関係の社会人参加者10名, BABA lab参加者8名)

(2) 活動時間

- ・6月から7月にかけて, 水曜日12時40分から12時55分までの15分間Zoomミーティング
- ・Zoom入室後, 学生数名との各部屋(ブレイクアウトルーム)に分かれて交流

(3) 活動方法

- ・ブレイクアウトルームを15部屋用意
- ・学生2~3名に異世代者1~3名で参加
- ・参加者が1分プレゼンを行った後, 意見交換

(4) 学生同士の交流

- ・第1週(6月9日)
メンバー顔合わせ, 全員1分プレゼンと意見交換, テーマ:「自分がはまっているもの」
- ・第2週(6月16日)
全員1分プレゼンと意見交換, テーマ:「のんびりひまなとき, こんなことをしてます」

(5) 社会人と学生の交流

- ・第1週 (6月23日)
メンバー顔合わせ, 各メンバーが1分プレゼン,
テーマ「小さい頃から大好きな料理メニュー」
- ・第2週 (6月30日) 学生の1分プレゼンと意見交換,
テーマ「こんなおばんになりたい or なりたくない」
- ・第3週 (7月7日)
社会人の1分プレゼンと意見交換, テーマ「若い友達ができたなら, 一緒にどこへ行って何をしたいか」

7. アンケート結果

社会人参加者の参加動機についてアンケートを行った結果を図1に示す。

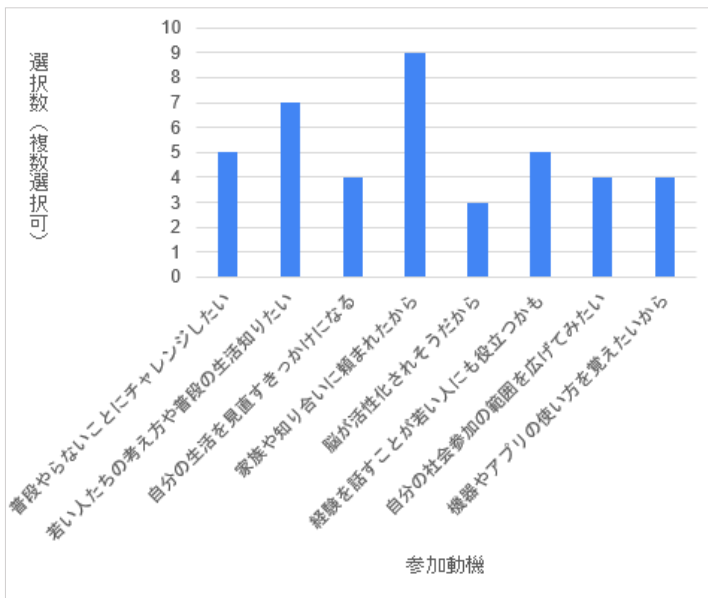


図1 社会人参加者の参加動機 (n=11)

参加動機として最も多いものが「家族や知り合いに頼まれたから」(9)である。次いで「若い人たちの考え方や普段の生活について知りたいと思ったから」(7), 「自分の経験を話すことで若い人にも役立つことがあるかもしれないから」(5), 「普段やらないことにチャレンジしてみたいと思ったから」(5)という回答であった。回答結果から, 若者への関心, 新たな挑戦, 自身の経験を若者に伝えたいというアクティブなシニア像が伺えた。

次に参加学生に行ったアンケート結果を示す(図2)。

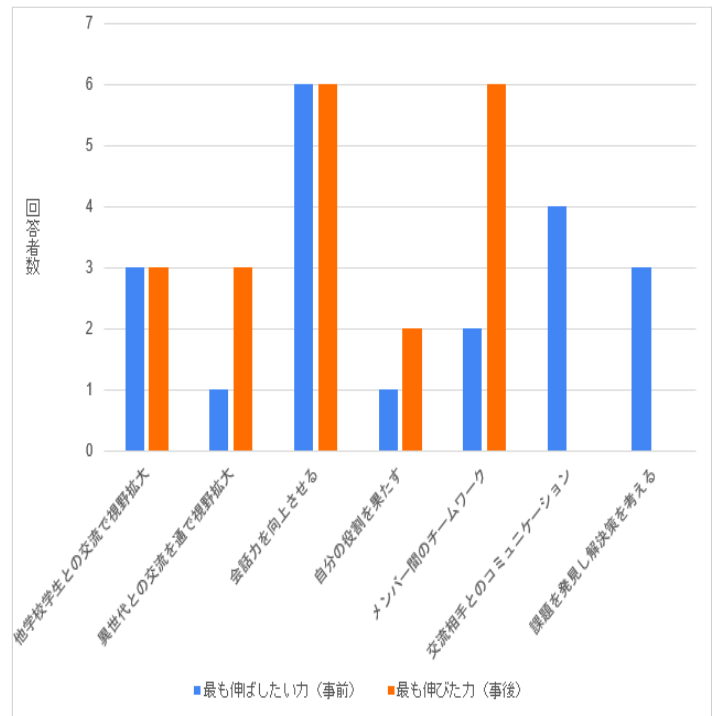


図2 参加学生の最も伸ばしたい力(事前)と最も伸びた力(事後) (n=20)

参加前に学生が最も伸ばしたい力と考えていたものは、「会話力を向上させる」(6)であり, また参加後に最も伸びたと感じる力も「会話力を向上させる」(6)であった。人見知りを克服して, 初対面の人と話ができるようになりたいという期待を持って活動に参加し, 学生同士, 学生と社会人参加者の交流の機会を重ねるごとに話すことに慣れ, コミュニケーション力が向上していったことが示されている。卒業後, 接客業につく可能性の高い学生も多い中, この経験を通して自ら積極的に会話をして楽しめるまでに至るこの活動の段階的プロセスが極めて有効であることが推測される。

参加前には期待していなかったが(2), 活動が終わってみると最も伸びた(6)と感じる回答として最も多かった。もう1つの項目が「メンバー間のチームワーク」であった。他短大の学生と話す際, また社会人と話す際に, 会話が弾むように学生同士で知恵を出しあい, 結束して何とか乗り切っていたということが伺える。

一方活動前に伸ばしたいと感じていた「交流相手とのコミュニケーション」や「課題を発見し解決策を考える」については, 今回の調査では「最も伸びた」と考える回答はなかった。

8. 4つのグループインタビューの分析

2021 年度活動の成果と課題について、学生、異世代グループ1（前年度からの参加者）、異世代グループ2（BABA lab メンバー）、教職員・自治体職員の4つのグループそれぞれに、Zoomでインタビュー調査を実施した。

分析方法は、インタビューを録画し、録画データから逐語録を作成して、KJ法による分析を行った。インタビュー調査の内容は次の通りである。

(1) インタビュー日時・時間・参加人数

- ・学生参加者
7月7日 40分、学生8名、教員2名
- ・社会人グループ1（前年度からの参加者）
7月6日 60分、社会人参加者10名、教職員4名
- ・社会人グループ2（BABA lab メンバー）
7月6日 60分、社会人参加者3名、
BABA lab 運営者2名、教員2名
- ・教職員・自治体職員
7月20日 60分、教員4名、大学職員2名、
自治体職員1名

(2) インタビュー場所：オンライン Zoom

(3) インタビュアー：三田/記録を兼ねる

インタビューは、参加者本人より録画の許可を得て動画・音声録音を行った

8. 1. 社会人グループ1（前年度からの参加者）

前年度から参加していた異世代者インタビューをKJ法で分析した結果は以下の通りである。

グループ1のメンバーは、昨年度と今年度で実施方法が異なることについてのコメントが多かった。今年度は、参加短大の時間割の変更に伴い、交流時間が1回につき15分と限られたため、あらかじめ交流ごとのテーマを決めておき、参加者は最初に全体説明を受けることなく、Zoom入室後直接ブレイクアウトルームに案内されるという方法で実施された。

テーマが指定されていたことについては、話しやすかったといったコメントがある一方、自己紹介の機会がなくいきなりテーマについて話すことに抵抗があるというコメントも見られた。またこうした形

式により、学生はテーマについて用意していたパワーポイントの画面の説明後黙ってしまうことがあり、前年度のように自己紹介してから会話を発展させる方法に比べてコミュニケーション力不足を感じたというコメントも見られた。

「私個人としてはテーマがある方が話しやすかったです。きちんと一回目はこのテーマ、2回目がこのテーマ、3回目とは決まっていると、事前に何を話そうかなとか相手が話をされた時に話しやすかったというのは、正直あります。」

「突然好きな食べ物の話からだったので、それぞれの自己紹介をする時間がなく突然食べ物の話が始まってしまったので、それぞれの人がどういう人でっていうことを私も話し出すきっかけがなく、司会の方からどんどん食べ物の話が始まってしまったので、2回目になって、実は私はこうでねっていう話をするのができたりとか。」

「今年の学生さんは黙っている時間が多いのかなと言うような感じが致しました。」

ICT機器の操作については、昨年度に比べると慣れてきており、参加者の年齢にもよるが、機会が与えられれば使えるようになるのではないかというコメントがみられた。

「去年の後期のことと今回を比べますと、やはり今回の方が気持ち楽に使えるようになってきています」

「全般的に機器の扱いも、知らないことも知らないが終わらないので少しやってみようっていう少し前向きなところが出てきました」

「操作のやり方については地道に教えていただければ、これに参加したいっていう気持ちがあれば、できる人はできるのかなと思ったので。」

学生にも異世代者にも事前講習をする必要があるという指摘があった。学生については、高齢者が聞き取りやすいよう低音で話す心がけが必要なことが指摘された。

「私も70代に突入しまして、耳の方も遠くなるんですよね。ですから学生さんが小さな声で話していると小鳥のさえずりのように聞き取れないところがあるんです。最近気がついたんですけど、高音がよく聴こえないもんですから」

「私も高齢者に接する学生さんの指導したことがあるんですけど、音を低めに出しなさいって、意識してねって言うことができますよね。そういう小さなスキルって確かにあると思います。」

高齢者については、機器に慣れるための事前講習とともに、交流活動に参加するハードルを下げたための事前サポートを期待する声があった。

「世間で今Zoom, Zoomって言われるので、ただその時にちょっと不慣れな方が多いと思うので、事前の打ち合わせみたいなものを、機械の扱いも含めて1〜2回やってみる。今回学生さんには事前ミーティングをなさってるってことなんですけど、年長者の方もそういうケアをしますからってハードルを下げてあげれば入りやすくなるのかな。」

「私としては機器の扱いより、自分にとってはこういう活動に参加する時に何が1番躊躇したかというところ、やっぱり自分の性格もあるんですけども、知らない世界になかなか踏み出せないというのがあって、少しそこをサポートしてくれるとか、少し一押ししてくれるものがあれば」

このように様々な課題はあるものの、若い世代と交流したいという異世代者は多いので、広報の仕方を工夫すれば多数の参加者を集められるという意見があり、また具体的な方法が提案された。

「自分とは違う世代の話を、孫感覚で知りたいという方がたくさんいたので、Zoom講座みたいなものがあって、あとは本当に聞くだけ、お話を聞いているだけでもすごい楽しめる方も多いと思うんですよ。異世代交流したいシニアの皆さんもたくさんいると思うので、需要はあるんじゃないかなと思います。」

「今日のような機会を大人の世代というか高齢者世代だけでトレーニングするような機会をひとつ作っていただく、その上で本番に臨むというのはですね、慣れてない方でしたら、テレビみるように、今回は聞いているだけでいいですよというやり方もやって、面白そうだなって感じた方はその後、例えばその近くの人に聞くとか自分の子供に聞くとかしながら操作を覚えていけば、自治会で参加していくっていうようにテレビを見てるだけでもいいですよという参加方式も1つあってもいいのかな。」

8. 2. 社会人グループ2 (BABA lab)

社会人グループ2 (BABA lab) のインタビューをKJ法で分析した結果は以下の通りである。

まず指摘されたのは学生のコミュニケーション能力の低さだった。今回は自己紹介の機会がなく、いきなり1分間プレゼンという形式で実施したため、このイメージが際立ってしまった可能性がある。

「1分間というふうにしゃべるつもりで話しはじめているのだろうが内容的には非常に短いので30秒位で終わっちゃうから、1分しゃべると言うことがあんまり認知されてないとかね。」

「やっぱり普段そういう喋り方をしてないんだなっていうのはすごく感じましたね。感情的な言葉っていうか例えばラインのやりとりみたいな本当にあの脊髄反射的な会話をしていました。何か友達同士で全部言わなくても通じる間柄でしか対応していない会話をしていないとそうなるだろうな。」

学生のコミュニケーション能力を向上させる方法の紹介や励ましのコメントもあった。BABA labメンバー自身がYouTubeの「シニアチャンネル」で最初は不得意だった1分間Show & Tellが上手になっていったという経験を踏まえ、学生たちもこのような機会を繰り返し持つことで、社会的スキルを身に付けていくことができるという指摘があった。

「事前に1分のプレゼンってこういうものなんだよとか、我々協力できるとしたらシニアチャンネルを前もって学生に見てもらおうとかでも全然違ってくると思うのでそういう感じで活かしていただければと思います。」

「初めのグダグダのところから 最近のその 1 分できっちりまとめられているようなところっていうのを見ていただくと大人でもそうなんだからみんなもっと練習していいんだよ、みたいなのがあの勇気づけになるんじゃないかなと思う。」

その一方で、本取り組みの意義は大きいというコメントもあり、大学での必修科目化の提案もあった。

「本当に大学とかでやるのであれば、ちゃんとシラバスの中で正規の科目としてやっていくぐらい取り組んだ方が良く、それだけの意味もあると思うんですよね。」

「自分でこれから社会に出た後でいろんな世代のおじさんおばさんたちと付き合わなきゃいけないことは、もう否応なくあるんだから、そのためのスキルになり予行練習として必要なんだという意義をちゃんとわかってもらうとか、いずれは大学側でそのまま科目、カリキュラムを組むときに、そういう重要性をきちんと大学側も認識して位置づけていくとかしていかないと結局社会に出て企業だとか役所だとか組織の中の人たちが迷惑を受けるし、本当につらい思いをすることになるから。」

高齢者募集のアイデア、募集協力のコメントも得られた。

「この取り組みが ICT を使った異世代交流というテーマなのであれば、スタッフの人があれこれそのつなぎ方までお世話をしているっていうのが負担が大きすぎるので、シニアの市民団体とかも東京だけでなく全国もあるようですし、自分ひとりで Zoom に繋げるぐらいのスキルもある人で、異世代交流の対話にご協力頂けませんかって依頼文なり送るなりして。」

「私も埼玉県のような団体持ってますんでね。いっぱい。傾聴のグループも持ってますし、ほぼいろんな団体に加入して活動しておりますので、ご依頼があればいくらでも出しますので。言っていただければ。」

8. 3. 学生グループ（学生参加者）

参加学生のインタビューをK J法で分析した結果は以下の通りである。

まずコロナ禍での学生同士、学生と社会人参加者の交流は貴重な機会だったというコメントが見られた。

「なかなか話す機会のない他校の学生や異世代の方と交流できた点がよかった」

「異世代の方と交流する機会が全くなかったので、私は北海道の方とお話をする事ができたのが貴重な機会で、本当に参加して良かったと思いました。」

「すごく優しい方で結構質問してくださったりしたので会話が楽しかったです。」

昨年度も参加していた学生からは、経験を重ねたことで慣れ、緊張が解けたというコメントが見られた。

「去年よりも今年の方が会話をちゃんとできていたかなと思います。」

「去年は結構緊張していたんですけど、今年はちょっと緊張もほぐれてきたと思います。慣れてきたから緊張がほぐれたのだと思います。」

「話す自信が付き、初めての人と緊張せずに楽しく会話ができるようになりました。」

「あまり人とお話することが得意ではないのですが、今回沢山の人の前で自分の考えを発表できたことは自分でも大きな成長だったと思います。」

社会人参加者との交流については、自分の知らない世界に触れて学ぶことが多かったというコメントが見られた。

「人生の先輩方の素晴らしいご意見を聞くことができたことと、その後ちゃんと自分で考えることができたことが良かったと思っています。」「上の世代の方だったんですけど、考え方が柔軟だったんで、江戸っ子という普段使わない言葉を使われているのはびっくりしたり、結構発見が多かったなと思いました。」

さらにオンライン交流を通して様々なスキルが身に付いたというコメントも見られた。

「オンラインだからより表情や話し方に気をつけ、相手と交流することを学びました。」

「他の世代の方と私たちとでは時代が違うため、今この話をしてもそれって何?となるためそれをいかにわかりやすく説明しようか頭をフル回転させました。他世代の方と話す機会が普段はないので、他の世代の方と話すコミュニケーション能力が高まった気がします。」

「対面ではないので、スライドと語彙力と、表情を上手く使わないと相手には自分の気持ちが伝わらないのだなと思い、自分の表現力のなさにショックを受けました」

一方、難しさについてのコメントも見られた。ブレイクアウトルームでの司会は学生が行うことになっていたが、うまく進められずに、沈黙の時間ができてしまったりしたことを反省している。

「最初は司会してたんですけど、話が途切れたときに自分から発言しなきゃなというのがちょっと難しくくて、そういう時に異世代の方はよく話してくれたんですけど」

「話しているときに一方的に受け取るだけだったので、自分にスキルがあればもっと上手く会話のラリーができたのかなと思いました」

「短い時間でどれだけ自分の言葉で伝えられるか試される時間でした」

「もう少し自分から質問をもっとした方が良かったかなと思いました」

前年度はあらかじめ参加者の名前とプロフィールをお互いに提示していたが、今年度はそれを行わず、最初に自己紹介の機会がない上に、お互いのファーストネームだけが知らされていたため、話しづらかったというコメントが見られた。

「名前もあまり出さない方がいいということで、どこまで突っ込んでいいのかが分からなかったりして話題があまり広がらなくて」

「自己紹介をしていなくて、名前も下の名前だけで、どこまで踏み込んでいいのかで悩むことがなくていいのかなと思いました」

8. 4. 教職員・自治体職員

教職員・自治体職員のインタビューをKJ法で分析した結果は以下の通りである。

まずコロナ禍の中にあって、本取り組みの価値を評価するコメントがあった。

「昨年からの印象としては色々な地域の中でコミュニケーション不全が起きている中で、WEB環境を通じて対話をすると言う新しい交流はタイムリーだったのではないかなと思っていますし、全ての方の共通の課題としてコロナの影響、何らかの問題を抱えている中でそれぞれの困りごとみたいところを対話しているということはすごく面白かったというか学びの「場」にもなったのかなという風に思っています。」

「活動としては非常に良い活動だったなと思います。学生にとっても有意義な経験だったのではないかなと思っています。」

次に、経験の積み重ねで学生も異世代者も習熟しているというコメントがあった。

「昨年から継続して参加している2年生は慣れてきたようで、勝手にわかることもあって余裕のある印象を受けました。」

「去年との比較では、時間が短いというのがあるんですが、異世代の方々、特に多摩平の方々は慣れていてくださっていて、どんどん進めていただいたり、あるいは去年と比べて楽しんでいただくこともできているのではないかなと思いました。」

地域と連携する活動の意義についてのコメントも見られた。

「住民が主体となった「場」の中に、そういう専門的な知見を持った方が入ってそういう活動自体が活性して行くことができるのではないかなと思います。」

「地域課題を共有させていただくことによって、仮説立てとか取り組みイメージができるんじゃないのかなと思いますので積極的にこういう情報も提供させていただきたいなと思います。」

「課題共有が地域と一緒にできると、地域住民へのアプローチと言うかそこにかかる時間というのはすごく短縮できるのではないかと思います。」

「食であるとか美容であるとか色々なコンテンツを持っていらっしやって、そのコンテンツを通じてどういう風に社会につなげられるのか、活かせるのかということもあるんだと思うんですね。」

さらに連携することで、これまでにはない企画、活動によるイノベーションを期待する声もあった。

「世代間交流が何なのかと考えた時にイノベーションなんじゃないかと思うんですよ。高齢者だけじゃなくて高校生小学生とも連携しているんですけども地域のソーシャルキャピタル力というものだと思うんですね。」

「多様な人たちが繋がり合うこと、繋がってなかったものが新しく繋がることによって発見があったり発想が繋がったり見えなかったものが見えてくる場所があると思うんですね。」

「こうやってプレゼンをしたりだとか、お話をしている中でぽっぽっと出てくることをいかにうまく拾えるかと、それをいかに適切なところにつなげることができるかということになるんでしょうね。学生さんたちも報告をあげてどうだったという感想を言ってもらえるのもいいんですが、こういうことがひとつの課題になるのではないだろうか、これからこういうことに対してはどうしたらいいんだろうか、なんてことを考えてもらうということも大事なことかなと思います。」

最後に、不確実な社会での学びあいの「場」づくり、連携を通じた学びの重要性が語られた。

「双方の学び合う『場』というところですが本当に大事だと思ってまして、今回のコロナ影響も含めてよく文化ということを言われますけれどもこの先不透明、

不確定で、不確実な社会という中では誰も答えを知らないわけであって行政職員と大学の先生たちも含めてこの対話の中で学んでいくことが非常に多いのかなという風に思っております。」

「小・中学校・大学も含めて今社会の中から学ぶ時代なのだすごく実感しています。学校で教えるよりもすごく密度の高い学びというものは社会の中にも取りばめられているのではないかと思います。」

9. 考察とまとめ

2020年度より開始したZoomを用いた学生と社会人のオンライン交流について、4つのグループのインタビューやアンケートを通して活動の成果と課題を明らかにした。

2020年度前期に短大2校が連携して開始した本活動は、コロナ禍で教育機関における多くの課外活動が縮小あるいは中止に追い込まれる中、2021年度にむしろ拡大していった。それは、学生がオンライン授業によりZoom操作に慣れていること、感染リスクがないZoomのブレイクアウトルームでの交流であることなど、実施のための好条件が揃っていたためである。しかしこの活動は感染症拡大時期の緊急避難的な活動にとどまるものではないと筆者らは考えている。

本活動は、これまで筆者らが係ってきた学生の課外活動とは異なるものであった。従来の課外活動は、数か月間準備を進めて最後のイベントの日に初めて学外の社会人と接する機会を持つというのが一般的であった。しかし学生たちはその1回限りの学外者との交流を通して多くのことを学んでおり、また自己の成長を実感していた。それに対し本活動は、最初から直接社会人と触れ合い、それを定期的に繰り返すため、学生が試行錯誤して上達する機会が与えられているという特徴がある。活動2年目の参加学生はオンライン交流に慣れ、余裕をもって活動に参加できるようになっていた。

本活動が従来の課外活動と異なるもう1つの特徴は、学生側による一方通行の貢献ではなく、学生と社会人参加者双方が助け合う場となっているという点である。オンラインで話がうまくできない学生を社会人が温かく受け入れ励ましている様子をしばしば目にした。学生にとっては、今後社会に出た後にオンライン

で業務を行う際にも役立つ学びの機会となっている。

最後に、本活動が1つの学校完結型ではなく、複数の教育機関、公益社団法人、NPO 法人、地元自治体が連携することで、可能性が大きく広がることを筆者らは学んだ。今後は学生と、高齢者を含む異世代者がより参加しやすい仕組みを検討し、実施時間帯、実施回数、そして交流内容について試行錯誤を重ね、プログラムを改善しながら調査研究を続けていきたい。さらにこの活動に関わる団体との連携を強化し、SDGsの目標17（パートナーシップで目標を達成しよう）の実現を目指していきたい。

文献

- 1) 檜山敦・永井祐樹・廣瀬通孝 (2015) 「『高齢者クラウド』における世代をつなぐインタフェース」 Proc. The 29th Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2015.
- 2) 荻野亮吾 (2020) 「With コロナ時代における地域のつながりづくりの方法」 『日本公民館学会年報』, 17, 57-65.
- 3) 佐藤公子・細川淳嗣・西田征治・狩谷明 美・今泉敏 (2014) 「65歳以上の Personal computer 初心者を対象としたもの開発と課題」 『日衛誌』, 69, 49-59
- 4) 高所真理子 (2015) 「スマートフォンスクール参加者の生活実態と教育効果—アクティブシニアの ICT 利活用による高齢社会の課題解決を目指して—」 『標準化研究』, 13 (1), 107-121
- 5) 八藤後忠夫・渡邊美里・本間正彰 (2008) 「ICT 技能が中高年のライフデザインに及ぼす影響 (第二報) —欧米における現状の概観と日本における関連プロジェクトの事例」 『文教大学生生活科学研究』, 30, 39-49
- 6) Ray Oldenburg (1999) The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other Hangouts at the Heart of a Community

Research on Intergenerational Exchange Activities Using ICT through Inter-university Collaboration

提出日：2021/12/10